

# 北九州市立文学館紀要

## 第7号

### 【資料紹介】

宗左近〈縄文〉ノート解題・翻刻(3) .....	稲田大貴 3 小野芳美
寄贈資料 2023年度 .....	6

2025年3月

北九州市立文学館

# 北九州市立文学館紀要

## 第7号

2025年3月

北九州市立文学館



## 【資料紹介】

### 宗左近〈縄文〉ノート

#### 解題・翻刻(3)

稲田大貴  
小野芳美

本稿では「宗左近 〈縄文〉ノート解題・翻刻(1)」（北九州市立文学館紀要5号 二〇二三・三）、「同(2)」（北九州市立文学館紀要6号 二〇二四・三）に続き、宗左近の詩集『縄文』（思潮社、一九七八・一一）の創作ノート三冊のうち三冊目「三善晃氏に捧げる縄文」を翻刻・紹介する。

ノートが書かれた期間、体裁について再度記す。「三善晃氏に捧げる縄文」は、冒頭から二八頁までは、「詩集『戦争』」、「小説『若年』」についての記載があり、それぞれ一九七五年七月、一九七六年一月に書かれた。空白頁を挟み、『縄文』についての記述が続く。これらは脱稿、入稿時期のもので、三冊のなかで最も遅い時期のものと推定される。ノートはツ

バメノート株式会社製、ツバメノート。体裁はセミB5版（179mm×252mm）、五〇枚。

本ノートのタイトルにあるように『縄文』は、三善晃に「捧げ」られたものであるが、三善の依頼以前から構想され、準備されてきたものである。(2)の解題でも述べたように、三善の依頼は一九七八年二月一日より前の、それからそう遠くない頃と推定される。本ノート四二、四三頁には、『縄文』収録詩の初出に関する記述があり、最も古い時期に書かれた「焼きもの」は、日本橋の骨董品店「相馬堂／相馬美術店」が刊行していた非売品の冊子「相馬」八二号（一九七六・七）に掲載と記されている。その後も断続して「相馬」に詩を書き、それが『縄文』に収録されている。他にも株式会社無限「無限アカデミー」刊行の詩誌「無限ポエトリー」などに発表した詩も収められている。

このように三善の依頼以前に発表した詩が多く収録されているが、三八頁には、依頼を受けてから新しく書いたものに関する記述がある。「夕映え」「舞踏」（収録詩「滝壺舞踏」か）「行進」「鏡の雲」「波の墓」の五つの詩がそれである。本ノートに記されるこれらの詩に関する

る記述は、音楽的なものが強く意識されており、それは三善から依頼を受けたことが主因であろう。

『縄文』が、三善の「混声合唱と管弦楽のための詩篇」のために書かれたものであることは疑いないが、その大部分の詩は、三善の依頼以前に発表されており、そのために書かれたものではない。宗があくまで一人の詩人として「縄文」に向きあつた作品と、三善晃という存在を傍らに感じつつ書かれた作品とを、融合させて編まれた詩集が『縄文』であるということをして、このノートから窺い知ることができる。

「宗左近〈縄文〉ノート解題・翻刻」は本稿をもつて終える。宗のいう「縄文」は、考古学的なものを越え、文化史、あるいは文化観であると同時に、宗自身の戦争体験、母、友人たちの死と深く結びついており、極めて複雑な問題系である。これは宗左近の作家研究においても、また宗左近という詩人を文学史的にどのような位置づけるのかという詩史研究においても、直面せざるをえない問題である。本稿はその問題を考えるための、一つの道具である。

(いなだ だいき 学芸員)

#### 【凡例】

ノートの翻刻は次の方針に拠る。

- 一、本資料は横書のため、同様に横書で示した。そのため、始まりを本誌背表紙側とした。
- 一、旧字体、異体字は原文通りとした。
- 一、仮名遣いは、原稿の通りとした。
- 一、誤字、脱字と思われる箇所も資料の特性上、原稿の通りとした。
- 一、判読できない文字は■とした。
- 一、削除部分は、判読可能なものは二重取消線で、判読不能な字は■とした。
- 一、本資料は赤色、青色のペンによる書込が多数あるが、印刷の都合上、すべて黒とした。
- 一、本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句があつた場合でも、原文の芸術性・歴史性を考慮してそのままとした。

三善晃氏の「縄文」について (1970年代)

1) 7月12日 53行  
 (A) 7月14日に。  
 (B) 7月14日に。  
 (C) 7月12日  
 (D) 7月10日と11日と12日に  
 (E) 7月10日と11日と12日

読書全集の  
 活字の  
 (A) 7月11日 10時前  
 (B) 7月11日 10時前  
 (C) 7月11日 (工) 5時

読書全集の  
 7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

三善晃氏に捧げる縄文 38-39頁

1日 16行だけ

読書全集の  
 7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

7月18日 (土) 7月18日  
 1月12日と13日  
 7月10日と11日と12日  
 7月10日と11日と12日

三善晃氏に捧げる縄文 42-43頁

# 寄贈資料

二〇二二(令和五)年度

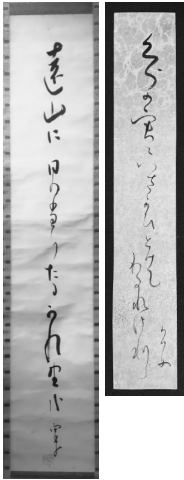
■杉田久女短冊、高浜虚子句幅 他 三点

寄贈者 坂口和子

受入月 二〇二三年六月

直筆資料は、北九州市ゆかりの俳人・杉田久女(一八九〇〜一九四六)の短冊、俳人・高浜虚子の句幅の二点で、前田まさを旧蔵品。他、前田まさを・小嶺女『遺句集 和布刈』一点。

前田まさを(二九〇八〜一九六八)は門司市(現・北九州市門司区)生まれ。門司の俳人・久保晴に師事し、門司俳人協会副会長などを務めた。



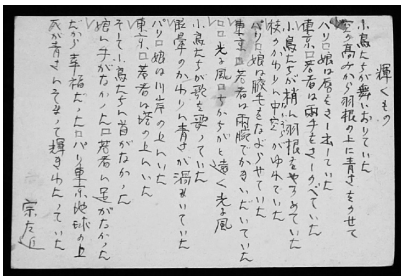
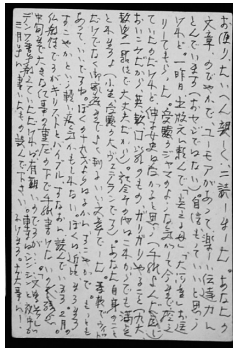
■宗左近書簡、葉書 一式

寄贈者 大坪伸子

受入月 二〇二三年六月

宗左近(二九一九〜二〇〇六)は、遠賀郡戸畑町(現・北九州市戸畑区)生まれの詩人。

寄贈資料は、一九七一年〜七二年に寄贈者に宛てられた書簡五通、葉書八通、計一三通。



■平野啓一郎旧蔵ワーキング・チェア 一点

寄贈者 平野啓一郎  
受入月 二〇二三年一〇月

北九州市八幡西区出身（二歳から高校まで在住）の作家・平野啓一郎氏（一九七五〜）が使用していたワーキング・チェア。ブランドは、RECARO。

平野氏は一九九九年、京都大学在学時に「日蝕」で芥川賞受賞。大学卒業後、ワーキング・チェアを購入、『葬送』（二〇〇二年）から『三島由紀夫論』（二〇二三年）までの執筆時に使用した。



■林芙美子関連書籍・雑誌 一式

寄贈者 林芙美子資料保存会 吉田清春  
受入月 二〇二四年三月

門司市（現・北九州市門司区）生まれの作家・林芙美子（一九〇三〜一九五一）の書籍、関連書籍・雑誌等、あわせて二六八点。

■芥川賞・直木賞関連資料 一式（書籍、原稿）

寄贈者 竹之内靖方  
受入月 二〇二四年三月

第一回（一九三五年）から第一五九回（二〇一八年上半期）までの芥川賞・直木賞作家の第一作、初期の作品および、第一回直木賞作家・川口松太郎の自筆原稿など三四九点。



【98頁】

☆ フィナーレのテーマ。▶ **漂流物はなお**  
 わたしはなお漂ってゆかねばならぬ  
 なか  
 きみたちのひとみの波の ■ ■ 手を

☆ ここはどこなのだ、きみたちの夢のなかで  
 ないのなら… **切れ落ちて**いる海、これが

NB ~~ああ、ここは わたしの わたしだけの  
 みた夢のなきからのなか ■ だったのだ ■  
 ろうか~~

☆ **飛行機雲**の刻む縄文はまやかしてないの  
 だと

☆ きみたちの夢のなかのわたしの夢なのか  
 それとも きみたち自身もまた 誰かの  
 夢のなかの発端に今であるにすぎなかった  
 のか →※99頁Aへ

☆ 眩暈よ 縄文のほどけてゆく縄文の  
 刻み出す メマイよ  
 黒く 縄文の黒くて赤い虹よ  
 炎となった鐘よ

◎ **どこまでも細長い鏡の帯よ**  
**ずたずたに切られた幻の糸よ**

コレガ  
 テー  
 マ

【99頁】

☆ 横転し噴出し懸垂し 懸垂し接吻し  
 降下し反転し湯走する 飛行機雲らの  
 縄文  
 いざなわれながされる どこまでも  
 読めない文字の文様。

これ、  
 独立させる

☆ 大空のなかの湖の底に燃える爐の  
 なかで燃える氷のちらす火花

A) **のではないあかしよ、アカシよ、夜光虫よ。**  
 カケラとなった縄文の鏡よ、

☆ 「フィナーレ」は祈りでなくてはならない。  
 うるむ うれい、うながされる うた  
 のうみなばら

【100頁】

78,6月25日  
 ☆ **どんな祈り**がありうるのか。 午後2時まで  
 考えること。  
 吹ききる風が { 祈り } でありうるように。  
 { とお } { 息吹き }  
 ou 祈りの形で  
 せめて 吹きとおる風がきらめいて祈りの姿と  
 なるように。

【95頁】

- ☆ 場合によって「火口湖」を使う。  
ただし 最終行の次に 何かもう少しだ。  
《■茸みたいに若い王は 二つに折れている  
白い果肉にだけ 暁は訪れるのか》

【96頁】

- ☆ 海のなかの夕焼け ou  
夕焼けのなかの 海

これ、フィナーレに生かす

浮きあがってこない  
潜航艇のために  
透明になってゆく海

焼きつけられた  
■■よ、縄文

☆ 潜水艦 — 潜航艇

☆ 海底の宇宙衛星 水泡

☆ 折れた(潜望鏡)

☆ 飛行帽 軍半長靴、短剣、  
防水服。  
漂流物よ。 ← 明るい波よ

- ☆ 海のなかの夕焼けの火事炎のゆ  
らめき  
焼 燃えあがり 焼けつゝかない  
炎のきらめき

- ☆ ここにもってくる  
「きみたちは生き続けていてくれなくては  
ならない (夢を見) に<(の) みられで  
わたしは きみたちの夢のなか の  
なかの人物にしかすぎないのだから
- ☆ わたしの海のなかできみたちの夕焼けが  
きみたちの夕焼けのなかで わたしの海が

【97頁】

序曲とフィナーレが同じVocubulaiesでは面白くないのでは！

- ☆ 裂けよ空、燃えよ時。  
はじけよ星、くだけよ ひとみ。  
いつも白い
- ☆ 暁はいつも(臉をふさぎ)なぜ黒いのか。  
まひるは なぜ 必ず 赤茶けているのか  
黄いろいのか。

☆ 破けた塔よ (にいない貝たち)

◎ ((さらされ貝塚よ、あばかれた 住居跡よ  
墓よ)

NB た

◎ { ち■ざれ雲 はぐれ波 しぐれ雨  
はがれ風 ながれ花火  
(これを くりかえしての フィナーレ)

NB

- ☆ 風よ  
ほろほろ  
石ころ波 わかれ  
ほろほろ波 ただれ波  
まだれ波 そのひら波  
やなぎ ほたる

【92頁】

5e-1°

- ① 終曲 フィナーレ 祈り=苦い訴え  
 海のなかの夕焼けの海 問いかけか  
 てとけない 緒土の  
 NB { むすばれた縄文の 時の 縄よ  
 砂に ■ きざむ風紋の渦の流れよ

- ☆ わたしはなぜなお渡ってゆかねば  
 NB ならないのか きみたちの何によって?  
 ☆ 祈りとはそのまま問いかけなのか

- ☆ 空気で } できあがる 縄文の鉢よ  
 空気の泡で } 鉢のそばの 土偶よ

「縄文」においてこそ

- （ おお 季節よ おお 城よ  
 無傷 とくに 魂が 無傷なのか  
 ▶ これのタグイがおびき出されなければ  
 ならないのに…

- ☆ おお縄文、時間を透明にするために  
 こわれている 破片  
 （ 時間の壁をこわすために透明な時間の  
 水をたたえている壺

- ☆ こわれても 水は流れ出さない  
 炎の壺  
 光の鉢  
 時間の肉

【93頁】

40行 以内 → ここからまた 新しい  
恐怖が 生れてなくては  
ならない

- ☆ 透明な時の城よ  
 湖の底に崩れたままの塔よ  
 ☆ ルフランあり

よ

- ☆ ともしび とほもす とおい闇夜の底  
 貝殻 塚の貝たちの ゆらめく闇の海

雲の列挙だ

→ これは前の方の《縄文おどり》あたりに  
《 行進》

はぐれ  
 てのひら雲、まぎれ雲、なげき雲、やつれ雲  
 なだれ雲、ひかれ雲、ひびき雲 匂い雲  
 わらい雲、錯雲 飛沫雲、エレベーター雲、  
 網焼き雲、あられ雲、鉄砲雲、まないた雲、  
 ほった雲 ■ ■ しだれ雲、

- ☆ 雲のかわりに何が列挙できるのか  
 氷 風だな

【94頁】

- ☆ 夕焼けよ 火縄銃の銃口よに燃えつけよ  
 ☆ 目を見開つばなしにすることが  
 何も見ないことである黒い目よ

- ☆ 時間の肉につつまれたまま  
 凝え切っている母のなかの幼児はら児よ。

- ☆ いつも折れている足よ  
 貝のなか折れたまま溶けている貝の足よ

☆ これから推して三聯だ

☆ どこにも ■れない空のひろがるなかを  
 行け  
 行かない  
 地球に まわない 眩暈のなかを

【89頁】

仲間  
 ☆ うんうんうんうんうんうんうん うなれよ 夢  
 く く く く く  
 ☆ うめ うめ うめ うめ うめ になれるよ夢を  
 うんうんうんうんうんうん  
 飛べ うめけよ 宇宙 ■ うめろよ 海を  
 骨を

ろろ ろろ ろろ ろろ ろろ ろろ

☆ こハ こハ こハ こハ こハ こハ

ころせよ (べよ)  
 殺せよ  
 ころがせ 地球  
 ころせよ  
 こおれよ 夜よ

はじけろ はらわた

は は は は は は はらばえ 悶え

☆ はハつはつハはつはつはつはつ はじけろ 死ハ  
 ほつほつほつほつほつほつ くるえる 平安 遺書  
 くるくる くだけろ うつつ

(はらばえ)

はばたけ 夢よ  
 はしれよ 雲よ  
 はな咲け はばたけ 縄文  
 はき出せ

【90頁】

V V V V  
 ☆ Boa Boa Boa Boa Voa  
 綿ぐるまのわだつみのわたのはな

☆ きり子

たち  
 ☆ おれハが流れてゆくところ  
 (夢のなかなんかであるものか)  
 そと  
 ☆ きみたちが歩いてくるところ  
 そと  
 (夢のなかなんかであるものか)  
 ☆ ところとところの合うところ

【91頁】

行進 の書き出し、どこからだ？

6月24日(土)夜10時半、考えている。

さあ行進だ

ししん しんしん ししん しんしん

しんしん 歩め

きみたち行進する

おれたち行進する

波のない波

集まれ波 波立て波 はがれ  
 ばらばら波 無意味な波  
 くだけ波 あられ波

☆ おれ 目をつぶる きみたち目をひらく  
 きみたち 目をつぶる おれ目をあける

【86頁】

e 行進軍 → 次第に祈り となる  
 2° =と呪い  
 炎の雲 (交互に相互に)

海雲のなかの行進  
 ☆ 断絶をこえての行進  
 ☆ 行進がうみ出す 断絶だ。  
 渡れない  
 空だ

- ① 三つの大きな声
- ② 一つのバス (低くて乾いてる)

- A 呪いの声
- B 祈りの声
- C 現在の声  
 [コーラスだ←情■況と掛け声]
- D 第四の声  
 (

☆ 雲波をよび集めること (びー玉波)  
 くだけ波  
 はぐれ波 まぎれ波 八はがれ波、ながれ波  
 (しぐれ) 三角波、あられ波、なみだ波、ちぢれ波  
 うろこ波 小指波、めがね波、えくぼ波、  
 糸くづ波、わた波、はがね波、はなびら波、  
 どり波、すべり波、とまり波、ふちなし波、  
 波なし波、(はら) 三日月波 どぶろく波  
 集まれ波 波立■てませろ波 ■ああ ばらばら波  
 無意味な波 波だたぬ波

【87頁】

(60行) = ■常のなかでの行進と合唱

☆ しんしんしんしんしんしん 雪がふる  
 ☆ しねしねしねしねしね 雪がふる  
 むかしのままに雪が■まいおる  
 むかしのままに血液がまいあがる

ひとがた  
 ◎ ☆ 動けない人形 の行進だ  
 = 縄文土偶行進

☆ 三日月の鎌、  
 掌の石■斧。

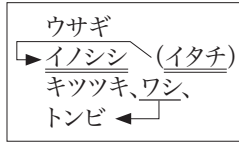
【88頁】

しんしん  
 ☆ しんしんしんしんしんしん しずかに歩め  
 じんじんじんじん じんよ おこれ  
 死ぬ 死ぬ 死ぬ ならない  
 (ならない) (ならない) (ならない)  
 死んだ 死んだ 死んだ 死んだ  
 どこへ どこから どこまで いつから いつまでも

■■■ つもらぬ ふるなかを  
 (地球に まらない 雪のなかの雪みたいにな  
 NB) この世をぬらさぬ夢のなか  
 地球に ささらぬ 氷のふるなかを  
 落ちない  
 ささらぬ

☆ 地球に 落ちない 光の舞うな■かを  
 イキ  
 ☆ くれろ くれろ くれろ くれろろよ 日よ  
 イキ  
 くれろ くれろ くれろ くれろろよ 生命を  
 ーこれ使わぬ。

【83頁】



☆ 兇悪な加害者の立場にたて。

これ大切にする クリ、  
トンボ、ドングリ、マクワウリ

オトコイシ、オンナイワ

☆ 鳥には {水かきを} / {羽根を} 夜には {目玉} / {羽根} を  
魚には足を。背には翼を！  
空

☆ 死んだか生きてか  
もぐったか、とんだか

☆ 陽の光に申さした(ひるまの焼き肉)  
月の牙にのど切られ(よるの炎だ)

☆ 滝壺だ {あかる光のおれたちだ} {おまえ} {おちるしぶぎのおれたちか！}

- ◎ ☆ シッポかついで やってこい
- ◎ ☆ ウロコ光らせ よってこい
- ◎ ☆ クチバシとがらせ 食べにこい

はね橋 はねた  
青空 おちたさけた  
川は赤くて (赤)  
花は白い ■ぞ

{ワシタカ  
キツネ  
ウサギッコ  
たちの死体  
たち}

黒い魚は君へゆく  
口あいて

☆ イノシシ、ドングリ、マクワウリ、→たちの死体たち  
☆ オトコイシ、オンナイワ、ヨドモ フタナリ ネド  
ス メス →たちの死体たち

【84頁】

☆ 雲にのって ■いる 若ものたち  
雲にくるまる→螢たち

☆ 貝殻のなかで 湛える(灯と) 灯のあおく  
貝にのまれる— あかり 貝殻は苦しみの縞を波うつ  
を刻ま ■れる  
で蓋される

☆ 滝壺からさかまいて  
くるめきのなかを昇っていく  
魚たち {幻なん ■ぞで} {あるものか}

☆ {身体なんぞはメイワクだ、  
{顔などなければさらにいい。

書き出し →

山がはじけた 海さかまいた  
吊り橋 はねた 青空さけた

【85頁】

☆ 今宵 タイマツが夕闇に火をつける {火の花咲かし}

☆ (花) {ふまれたコケが ■■■■■■  
しおれた花が踏まれているよ  
もぐれぬモグラが ■■  
(モグラがみんな死んでいる)

モグラが 闇ひきさいて  
目玉をむいて  
火の息吐いて

☆ 槍の ■さきには {赤い花  
斧 {ツツジの花

おののさきには 白い肉

{空のイカヅチ 大地のクチナフ  
むしやきされた 粘土たち

【81頁】

☆ 目玉収集家(王)

目玉から茎がはえる、根がでる、  
ただし、そのさきに花が咲きでる  
とき、目玉ははじめてしまう。

☆ ないものどうしの腕くむ踊りだ。

☆ カケラが星みたいにどうして光  
らぬ？

☆ カケラが濡れる、滝のシブキに

{ 王と奴隷の } 腕くむ踊りだ  
{ 面と仮面の }

Ⓐ 赤いホタルに青いホタル

- ■■赤いエビはガニに青いエビガニ。
- 黒 赤いミミズに青い■■ミミズだ。

【82頁】

d1 縄文踊り 3°

(原体剣舞連を学ぶこと)

☆ 踊りそのもの  
(カケ声いれて)=火縄おどり  
二行一連で 6連ぐらいか

☆ これ、やるぞ！(4月25日記)

滝壺踊り。

滝だ！

はねる

☆ 松明のまわりを魚がおどる  
(炎は海だ

手足をもった 魚がおどる はしる  
のあいだを (海は空気だ)

☆ 翼をもった魚がはねる  
(空気は波だ)

☆ 魚のしたを { 炎がはねる  
火の鳥がとぶ

☆ 赤い雲には黒い舌  
青い雨には白い耳

☆ 月はむごたらし 日は苦し

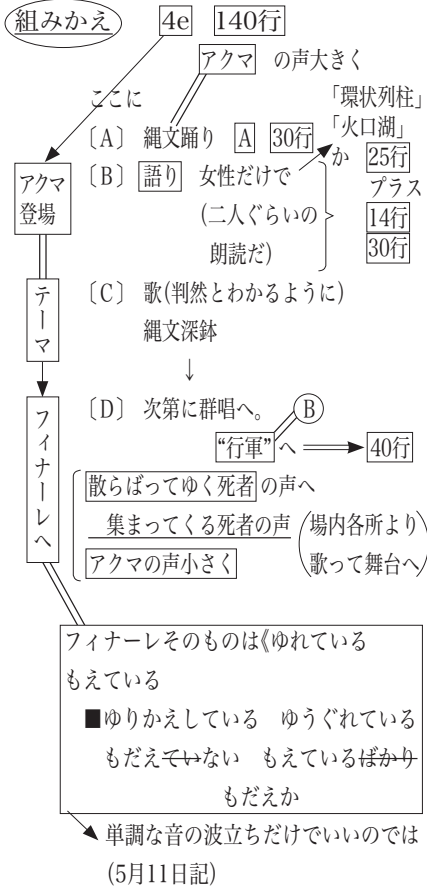
→ のたぐいの  
踊り歌を！

次の声の併用を！ 三者の対話を。

- Ⓐ 普通の声 (時間そのものの発する声)
- Ⓑ 踊る人々のハヤシと叫び (絶望の声)  
(それきたどっこいのたぐい)
- Ⓒ 現在からの呼びかけ (祈り)

【78頁】

① 急曲 ←→ 加害■者の巨大登場  
 空へ そして空から  
 (地面がないのだ) 里  
 死 そのものだ  
 〓  
 縄文 ← 原始への還帰と逆流  
 ☆ 断絶だ



【79頁】

たいへん短い詩《人形》をいれるか  
 ☆ 独唱←に近いもの (加害者の側からの)  
 30行以内を二つか  
 一つか

【80頁】

☆ 縄文踊り / 三者のカケイア<sup>ママ</sup>で高まる  
 アクマ 死者 生者  
 アクマの歌にする事。  
 こわくなくては 無意味だ。  
 目玉の滝の滝壺だ。  
 目玉をくらってムシャムシャ。

☆ オレタチ死ンデオレタチ死ナナイ  
 死ンデカラマデ生キテイルカラ  
 の カケラを  
 カケラと<sup>な</sup>ってオレタチハ踊ル。  
 ☆ タキノシブキハ タ■キノカケラダ  
 シブキノニジハ ■ユメノカケラダ

↓深まれ、突きぬける！

☆ 闇をつかんで口にいれれば  
 青い火となって螢がいっぱい }  
 →※ 81 頁Aへ

☆ オレとお前が肩くみあつて  
 (ない腕にぎり ない目  
 光らせて見つめあい)

☆ 滝壺ようし■て さかしまに  
 噴きあがらない！



【75頁】

⊙ 廻わり舞台(の表と裏と) 縄文  
ときみたち

- ☆ せり {あがる} {でる} 球根 地下の土蔵
- ☆ 屋形崩し
- ☆ 焼け跡に {植えられた草花} {つくられた花壇}

萌えてたのは 縄文からの花で  
なぜなかったのか。  
(焼けたモグラよ)

- ☆ (プールのなかの)潜水艇を浮上  
させることのない光の海の底
- ☆ ビルディング
- ⊙ 忍者の(かじる)桃の実、裂ける軍服のしたの  
吐きすてる 白い股腿の実。

⊙ 潮の青と血の赤との波 ■ うつ平  
行線のゆがぬ 縞の馬のをずり  
落す島、ずり落される空気の島

⊙ うかびでる、浮かんで もぐって  
使 う ゆく、唇のひれらた盃のカケラ、■  
さけた乳房の ■、ツギ、蛇のとって

【76頁】

- ☆ 切りさかれる {トカゲ} {イノシシ} の腹の赤い肉
- ☆ 波うちはじめる貝塚の貝のなかの蛇  
墓のなかの ■ ■ から這いでる  
重なった 貝塚の貝
- ☆ ヤジリ、弓、弓なりになる土中の月。

☆ 洗んだ落ちた崖の底 ■ ■ に落ちた  
夕日にむかって撃ち続けている  
高射砲(の水平射撃)

波間には落下傘が  
浮いている

- ☆ 焼け跡に植わっている落下傘の花
- ⊙ 垂直 ■ 輪切りにしてを続けて  
の 舞いおりてくる波紋。

☆ 落ちた落下傘はもうふくれあがる  
ことはできない。

【77頁】

書き出しは何からか？

- ☆ 宇宙船がとんでいる  
どうして 波頭が見えないのか  
(それはたえず落ちてきている)  
星の背 ■ 負った  
▶ 落下傘が幾つも

- ☆ 泳いでいる
- ☆ 地球のめまいのを輪切りにして
- ☆ 果汁がまたたいても稲妻にならない  
縞馬はただ走るばかりで
- ☆ 装甲車はただ走るばかりで

書き出し  
☆ 夕日にむかって高射砲が打ち  
続けている。

【72頁】

花はないのだ

峰岸啓三 風  
 峰岸もとめて ~~ちぎれぐも一つ~~  
 フィリップ レイテ島の目玉  
 (そだっているか)  
 啓ちゃん求めて  
 花一もんめ

土参  
 高橋哲男 匡  
 上参郷 親一弘 香 波  
 上参郷もとめて 風 飛行機ぐも一つ  
 瀬戸内 ■ 海の目玉 (ふとっているか)  
 たあちゃん求めて花一もんめ

高橋哲男 雪 雪  
 高橋もとめて ■ 梅雨の雨一つ  
大川端 ■ ■ の目玉 (とがっているか)  
 てっちゃん求めて花一もんめ

岡 水谷  
 中田 ゆり子  
 畑 中田き 畑 さくもとめて  
 (沖繩の目玉 ■ 一つ  
 むされているか 雨 ゆりちゃん求めて  
 花一もんめ

長谷川章二 長谷川 もとめて  
ほぼ スミ ■ ■ の目玉  
 (はじけているか) 夢 一つ 章ちゃん  
大陸 野火 火 求めて  
 花一もんめ

【73頁】

人名のすぐ次ぎに

雲、風、雨、火を一つ宛 ささげるか

☆ 魂よせは もはや 言葉にたよる  
 ほかはない。(5月25日、母の命日に)

【74頁】

のキャタピラが 雲なんぞであるものか。  
☆ 戦車の無限軌道 の ■ ■ ■ ■ くわえこんで  
☆ 高射砲(川のなかの) ゆく 空よ  
☆ 零戦、銀河 光っている  
☆ 落ちないで空中に 埋っている 不発 ■ 弾

まん  
☆ 高層ビルの な か を沈下して  
 ゆく潜水艦  
☆ 電線につ ■ ■ かまっている焼き  
 鳥たちの水平線

☆ 墓<sup>ママ</sup>などをうわばれた地球、地球こそが  
 宇宙の墓そのものではなかったのか  
 ☆ 先取りする死の霊のなかに(溺れて)  
 凍えていて自分の死はその霊をはじ  
 けさせることにどうしてならないのか  
 ☆ 一撃に押しつぶされる 時間の  
 暗さ、また薄さ。  
 ☆ 裂けた靴の口のくわえる ■ ■ 電線。  
☆ 落下傘 海 に植わっている落下傘  
 →もう一つイメージを!  
 落下傘部隊 → 焼ケ跡 に  
 ☆ 神風→特攻隊  
 ☆ 地下の潜航艇 → 戦艦 → 巡洋艇  
 甲板  
 ☆ 防空壕

【70頁】

- ⑤ 飛行機雲の切りさいてゆく → 大空の  
 大きな タマゴの白身 ) こういうの  
 だめだ ) ダメだ  
 に
- ☆ 刻んでゆく青空の白の縄文を  
 「ではない」
- ⑤ 宇宙は大きな土器なのか  
 土のかわりに光できている

※71頁(A)へ

- ☆ ジョオーモン 縄文
- 5つだ ← 人名と照応 ① 城門 ①
- ☆ 空しい門 冗門 = 饒門②  
 上門
- くさりの門 鎖門
- 錠のかけられた門 ② 錠 ③
- 娘の門 → 嬢門 ④

- ☆ 上問 する縄文
- ☆ 乗問 譲文、門、情紋、  
 ⑤ いかづちの城の門=縄文

【71頁】

- 戦争(空襲:爆撃、海の船——
- || 潜水艦
- ◎ のなかに くだけて、はじめて、  
 構成を求める縄文のカケラたち。
- 
- 名前 峰の岸 ひらける 三■か月  
 → のでんで
- ◎ 列挙する (ジョーモン)と次に  
 一語いるか。

- ☆ 水門 ①
- ⑤ 右と左 掛けあいにならぬか 山門  
 渦まく火の門 火門
- 渦紋 ⑤
- 指紋 ⑤
- 運河をめぐらす 苦悶 ②
- 城門の縄文 浮紋
- ⑤ の... ことばの次ぎに 風紋 ③
- ⑤ 娘 縄文の水門 正門
- 碑文 ④
- 糾問

【68頁】

C 3e 4e

破曲——破局

赤

80行くらい  
80行

テーマ

6月12日と15日と16日 ただしく  
正味二日で 《たてに重ねて》

戦争!  
激怒!

夢 → 空襲、戦争 = 死と

急転するもの →

地中に突き  
ささる  
不発弾

①—夢 ★ひどく難かしいぞ。

戦争を描くことは!

☆ 物質感にみちて non-sensの、  
事柄自体の(戦争の)ロマン。

デンシンバシラ、タンク、防空壕、

☆ 靴の歌 → 恋の歌 → 靴の話の歌

☆ 乳房の歌 恋

☆ 並木の歌

☆ 馬の歌 = 波となる

☆ このパート、三つの声がたてに重複する

↓

まる  
3日  
間  
か  
か  
る  
ぞ。

やがて二つに。  
そしてサイゴ一つに  
(同じことばを歌うことになる)

第1の声 わたし(なぜ縄文なのだ)  
なぜ殺されたとは  
もう問えないから

第2の声 コーラス(歴史という名  
の観客=客観)  
戦死者の説明(峰岸もと  
めて…は、わたし だ)

第3の声 “あくま”の声

【69頁】

☆ 漢語と横文字による 固い文章の  
間の ヤワラカイ 情念語=縄文語

25才

☆ 啓三(章二)ただす てつを きよかす  
人名をここでいれる

→ やつと入れた人名だ

☆ 地獄だ (戦争が地獄じゃない  
殺戮が罪ではない)

☆ 噴霧器の霧のなかにふきおとされる蚊  
アイロンの鉄板の下で焦げる蛾

羽根

足

◎蚊の目玉のなかの青空

◎蛾の { 腹のしたの太陽  
耳のなかの 草いきれ  
手足のしたの

☆ 一つの声 (憤怒!)

こういう卒直な声か  
なくてはならぬ?

きみたちの焼かれた光がまだ

きみたちを 焼いている

それなのに

きみたち自身があまりに

やさしいのだ

わたしは その光で (ああ

きみたちを焼いた当の光で)

きみたちの光を集めて 激烈な

爆弾を作らねばならぬ

投げつけねばならぬ しかし

どこに どこに

(いち早く 縄文のかわらけは

崩れているのか)

唇の  
☆ 伸び縮みする 波の鏡よ

☆ 書き出し、考えろ！  
のびちぢみする かけらの  
くれない  
しばみふくらむ

くれないの  
ふるえる肉の■■■  
ふくらむ つぼみ  
光のカケラ  
ふるえてるのだ、なぜ、破片のひかり  
ふくらんでるのだ、なぜ、どうして  
肉のつぼみ

【66頁】

☆ めまいの■のなかで  
瞳 の目玉  
恋で光るもの、きみたち縄文。  
ない瞳、ない瞳、目玉  
気球よ。

☆ めまいの渦ひろがりのそとで  
渦 輪に 泳ぐもの  
わたしの目玉、  
しばんだ気球よ。？

ぬれてめくれない

☆ はためいている 旗の列  
はためかない 旗の列  
魚が出たりはいつたりしている  
魚が染まったり褪せたりしている

☆ いつまでもどこまでも  
結晶できない 水晶体  
むたすら やわらかくしつか  
ありえないからこそ  
透明なのか

【67頁】

☆ 縄文 処刑された王子 歌  
いかづち  
○地上にさかさ吊りされた王子の晝  
縄文 ○地下に吊り置かれた王女の夜  
ひきさかれた王女の稲妻

地球の底で  
地球を浮き  
上らせている気球

○ { ☆ { 縄文 地球を吊りあげている気球  
{ 縄文 地球のつながっている  
{ 縄文 貴重な青空の噴きあげていた気球  
こちらをとる

☆ さかまかない時 破れない空  
“相馬”におけるか

☆ 縄文、焼かれた気球  
焼け落ちた気球

→ こういうタイトルで  
短い作品をつくる事

かわきついた水の磯の破れ目から  
魚が出たりはいつたりしている  
魚が染まったり褪せたりしている  
だからそが 乾ききった■夜の  
壁の破れ目だったと知れる

【64頁】

- ☆ なぜ縄文なのかを明示できるか？ Zyomon.
- ☆ きみたちに目がなく手足がもがれているとはわたしは決して思えないのだから。
- ☆ きみ 縄文の粘土をやいた力が（それは縄文その時代の男や女であるのではなく むしろ形を粘土に与えざるをえなくせしめている力であるに違いないと）

きみたちに目と手を與えるとき  
まわっていると  
わたしには思えてしかたがない  
のだから

- ☆ ああ 縄文、きみたちをもう一度  
生きかえらせたのではなく、きみ  
た■ちに形をあたえた力よ

- ⊙ わたしには罪があるのだから どうしても  
からには

なぜか 縄文がなくてはならないのだ

☆ 縄文 = 焼かれた 球根  
          = 虹の (地下茎)  
                  虹  
                  凍てついた時間の地下茎  
                  い

燃えたと 縄文  
わたしのともだちを 浮かび  
ときはなつために

【65頁】

- ⊙ 途中で 客席への呼びかけがはいる  
↓ きみたち は }  
☆ あなたがたは }どこにいるのか  
見え■ていた もう 見えない  
どこに  
☆ 見■えないから 聞いているのか  
聞いているから 見えないのか  
☆ ありはしないのだ いまなんて  
ありはしなかったように むかし  
なんて

情念の列  
擧 ちぎれ雲、  
てのひら雲、

雲の列擧

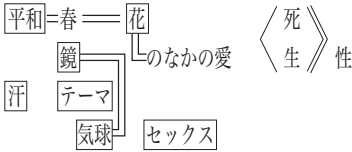
- ☆ きえる雲 うまれる雲  
→ いかり雲  
なげき雲、 こういう雲を  
幾つかつくる事  
(ばさら雲) やつれ雲、  
雪崩れ雲  
→ ウシロの個所へ

無に足がないように きみたちに目がないのか  
みみず 目  
水かき  
へびに手がないように きみたちに耳がないのか  
生かす

【62頁】

② 40行ぐらい → ※63頁①へ

思い切りシユールな方法で！



花の変態

対話篇

よびかけ

なぜ そこのなか  
エコー

なぜ ここのなか  
エコーなし

◎女の声(アルト)による呼びかけ

◎男の声(バリトン)による応えでない

応え

朝 あつ と夕焼けは

ここから

NB

夕焼けは へ溶けへ ている鏡だから  
空に立ちあかる夕焼けのむこうは  
縄文だから 》なんもない広がり  
だから

☆ { 悶え }  
{ 悲しみ } の裏ばりはもう剥が  
れているから

☆テーマ → 気球

きみ■たち、きみたち、どこにもいない  
きみたちどうすればいいのか、きみたち  
ルフランによる次第に高まる激昂

☆ 鏡のなかの叫びなのか

向い合う

こわす手段はある  
のだ ← コーラス

☆ 溶けている鏡だから破れないのだ  
こちらか■らの叫びによっては

落ちていたる気球を  
ふくらますことができるのか

【63頁】

① テーマ：きみたちの喚起、呪文によ  
る。気球だ。

☆ こことあそこをへだてている  
のはどんな地獄だったのか天国  
だったのか

☆ 呼びかけ。 だが、呼びかけう  
るのはどういう誰なのだ？

♀ = 鬼女 = とりつく女 = さしまねく女

こことあちらの不分明な分明。

これの具体的なイメージは何なのか。

答えの幾つか

① 舞台だ — 雲の花道 — 海の底

② 飢えない飢え。口から吐き出されて  
はねて ふとるエビ。

↓ は

泳ぎ出す活字の魚。

③ 溶けている気球のなか

銀河の石の上に落ちて  
(透明な眞珠貝のなか)

が瞳の影  
と(瞳そっくりの)  
にらみあう

☆ 二枚の鏡のなかのこことそこ

☆ 内側が鏡になっている気球  
鏡にはめこまれた瞳のために  
上昇する気球  
気球よ破けろ、気球よ落ちてこい。

NB 気球をふくらませることはで  
きない

もう

【60頁】

菜 菜

☆ 夢の花の種子よ ひびわれる夢の花のたね

☆ ■ 綿毛

☆ 蝉しぐれ

蝉の河、羽根のあみのなかのひと  
みの青さ

☆ 雀のむれのなかに見えなくなっ  
てゆくのか

虹 べに雀たち

しじゅうから、こじゅけい、むく  
どり、かもめ

☆ 虹が ほどけて流れる七色の帯  
のなかに

☆ 唇に指 ■ おしあてて

◎ 指におし ■ あてられる唇のくれないの  
のびちぢみする 夢の水面

幻の水面

☆ 仮面の底でいちはやく 割られている のか、  
扱られている

まなこ

☆ たとえ たぶん  
きつと ここは 見えないだろ  
うから  
そこは どうしてもそこが見え  
なくてはならない

☆ いま すきとおってしまってい  
るいまだから  
きみたち すきとおってしま  
かねない  
きみたちだから ることの

☆この思想追って■みる。

【61頁】

☆ 罪のハスの声 全篇にわたっての追求  
各パート、2つずつでいい。

① たとえそこはここでないにしろ  
ここはそこでなくてはならない  
これは決定 夕焼け  
ここから導き出す事

☆ 詩はしよせん 語彙でしかないのだよ。  
つむぎ出されない

☆ 思い出から(思い出されない)思い出  
曉から呼び出されない曉

二番センジでダメだ  
② はっきりそこがここでないのなら  
ここがそこでなくてよかろうか

③ わたしがそこへゆけない  
のならきみたちがここへ 別稿  
こなくてはならない

④ 縄文よ「いざなわれる」時間の縄  
NB 「ほどけない」 } これは別のパートへ  
縄文よ きみたちの「夢」の 渦巻き (歌) 文様

c 星でつくる橋 瞳の川 海  
星の瞳だけの流れる川  
◎ 物語の水をのみつくした魚  
物語の空を語りつくした鳥が  
流れなくても 泳げないのか  
が 溺れている て  
閉  
くびれていて  
泳げなくても



【58頁】

ゆるやかに

☆ たえず遠のいてはまたまみがえ  
よせかえす ねむりの渡ねむり  
け

きらら

☆ ひとみのきらめきのとよみの  
【雲母】 つらら

☆ むせるまぶたの夜谷できらめくひとみ  
みえない きみの 眞闇のなかの  
くるめきの ■ ■ くるしむ 虹

が

☆ くるしみのくるみを鳴らせ。  
っている  
【みじろがない】 → みのむし  
をむしれがゆれている

◎ 粉砕されたひびの  
いたったもの  
のイメージで  
なくてはならぬ。

☆ 毛間の中の白い肉(乳房の)肉  
のなかの

脇毛のなかに光るをぬめらせて  
風を待つ 若い ■ 滴

☆ 川はさかしまに流れてさかのぼる  
(だから泡立っている だから白  
■ くなって)  
でもなぜ水車はからまわりしなけ  
ればならないのか

◎ ☆ 波と波の間にひしめいてゐる貝  
の ■ 白い足  
泳ぎ出る

【59頁】

☆ 不足物点検

夕焼け まぶた ひとみ 雲母 つらら  
雲 ゆれる

◎ ☆ 白い道 白い水  
みなわ 水車

あふ  
◎ 湧き水 宝石の目からこぼれる  
涙ま 青い闇

これが本篇を書く(イミ)だ (5月4日)

☆ バス(とアルト)の声だけを追ってゆくこと  
そこから招ね ■ かけられないにしろ

a たとえ そこはここでないにしろ  
ここは 所でなくてはならない  
ここに そこを 招かなくてはならない

b さまよいでたもの ■ のがどうして  
さまよ たどりつけない  
■ 明るみのひろがりに  
をまねきよせる

b まねきよせねければならないのに  
まねきよせられなければならないのに

c (落ちてる風は舞いあがらないのか 風よ  
閉じている 瞳は 噴き)  
落ちてる  
止んでる歌は噴きあがらないのか

d 舞い落ちなければならない光よ

【56頁】

①

① 序曲の序

40行くらい

夕焼け

大和言葉風な音の連続に  
よる 呼びかけ

☆ お経を書くのだよ。

☆ 鏡なのだ 向いあった二枚の  
溶けているのだ ← 夢である  
ためには

☆ 夕焼けは溶けている鏡だから  
朝 鏡のむこうはもう縄文なのだから  
背中

☆ 待っていてももう朝はこないのだから  
明日はあってももうきみはいないのだから  
わたし

☆ 悲しみの裏ばりはもう剥がれていて

だしていいのだよ。

夕暮れの底

悲しみの波の描写  
夢のなかと外

青空

☆ 待っていてももう眞晝は映らな  
いのだから  
朝焼けは溶けている  
鏡なのだから

【57頁】

ゆうやけの

☆ くちびるばかりの波の花のはて  
しなくながれてゆらめくゆうや  
けのくちびるだけの  
(夕日はもはやないうすばかげろ  
うの)

■ 波うつだけの時の花  
(はがれてはそむく  
(飛行機雲

☆ 鳴っている 呼んでいない

☆ ゆれている まねいていない

☆ この形象化が10年来、  
少しも進まないのだぞ。

一つの声 (罪があつて罰のない声)

バス } これが全篇に陰陽となり たえず  
アルト } ひびいてゆくこと。

【53頁】

三部作 炎える母、炎える花、炎える

■ (■ズイ筆)

針

b 破

c 急

d 祈り → 行軍

【54頁】

① 序曲の序

一つの声と それをこわす二つの声

||

バス

花びら

縄文の土偶

にはえる

△白い歯よ、わたしよ

○きらら雲

暁いろの夕焼けの

夕焼けいろの暁の

ここに《たとえそこは  
ここでないにしろ……》の  
リフレインがはいる。

ああとちらだ  
どちらでもない

「濡れている雲のとりで。  
ひしめきあっている  
赤いカニたち

☆ 雲のとりで を  
ゆるやかに 濡れ  
させている もの

コーラス隊の声だ  
これ、考える事

◎ 夢の水門なのか

○ ひらけ縄文

// 溶けている鏡のなかで

夕映え ← → 海

暁いろ  
あけぼの山

【55頁】

この二行のvariationで  
続ける→サイゴを破調にして

たち

☆ きみ△ は夢を見続けていてくれ  
なくてはならない)→その夢のな  
かの登場人物でしか、おれはない  
のだ。

(「わたしがその夢のなかにあらわれ  
るために) )

☆ きみの夢のなかの、おれは登場人  
物なのか

わたしはきみたちによってしか  
存在できない生きものだから。

☆ くちびるのくれない  
のびちぢみする くるしみの  
くちびるの くるめき

☆ くちびるばかりの [ 波うち ] 夕焼け

お客への(現代人への)訴え。

☆ 舞台の上から 「あなたがたはどこにいるのか、  
|| 見えないから聞いているというのか」  
縄文の人々

☆ いまとは何か ← → ありはしないのだよ、  
いつだって いまだろうか

4e 縄文舞曲 約90行  
 完全にまる一日必要 { 再考 6月30日(金)  
 および7月1日(土)  
 三考 7月8日(土) }  
 滝壺舞踏

5e 行進 約90行  
 再考 7月2日(日)  
 三考 7月8日(土)

6e 終曲 《波の墓》 約45行。  
 再考 6月25日  
 || 三考 7月9日 380行  
 結局5篇だ

☆ 6月25日(日)夜9時以降、詩篇《縄文》全体の検討をはじめること。  
 7月17日(月)に思潮社に渡して  
 10月5日ごろ刊行、と申し入れる事。

↓  
 6月26日にのぼす(午前0時～午後3時まで)

☆ 6月26日(月)ラストだったのにspurtがかけられないな。

☆ 7月13日(木)夜10時《縄文》26篇(本にして90頁)全篇を完稿とした。明日、コピーしてないところをコピーして、午後4時頃三善さんにあてて発送の予定だ。

☆ 7月14日(金)パリ祭の午後2時半、発送ズミ。  
 ただし、そのうち「相聞」だけ、なぜかコピーなし、改めて書き直して、7月15日に発送した。

【52頁】

☆ 三善晃さんにささげる

《縄文》 78'、3月21日(火)

“東混”での指揮をきいた夜。

〔A〕 演奏会場にきたため、形式を考えた。

作曲・演奏 1時間半=90分

かなり長いな。

詩の行数にいくつもらえるのか。

$$\begin{array}{r} 6 \\ 20\text{行} \rightarrow 10\text{分か} \\ = \frac{15}{6} \text{分} \frac{15}{300} \end{array}$$

180行=ペラ18枚

||  
 300行はゆるされる。

ペラ30枚だ

〔B〕 構成 フーガとフーガを破るもの

a. 序曲 \_\_\_\_\_ 導入

“縄文”を出す—なぜ縄文か  
 帰れない

青空 ← → 火 ← → 死

① 序曲の序

改訂 340行前後 作品数 6篇～7篇

17枚～20枚 → やはり300行へ

15枚→1枚 6分 = 90分

## 【50頁】

- ☆ 6月12日(月) 午前9時～。少し書いた。
- ☆ 6月19日(月) 夜10時～12時『宇宙船』というのを(ほぼ半分ほどまで)書きすすめた。
- ☆ 6月20日(火) 夜2時間ほど書くこと。  
10行ほど書いた。
- ☆ 6月21日(水) 時間があるか、疑問だ。  
10行ほど書いた。
- ☆ 6月22日(木) 午後0時より午後7時半まで間に4時間ねるとして、正味3時間で『宇宙船』の終りまでゆく予定なり。 3e  
一応終る。  
《縄文舞光》にかかる。
- ☆ 6月23日(金)  
調子わるい。しかし、今日から雨がより梅雨らしくなり(昨日までは眞夏だ)、しのぎやすい。ただ今午後10時半。胸突き八丁にかかっている。  
だが、ともかく午前2時半まで《縄文舞光》にとりくんでみることにする。
- (α) 午前1時間までの正味2時間でほぼ100行の《縄文舞光》の第一稿。まったくダメだな。 4e  
あと、正味2日かかるよ。
- ☆「行進」と「フィナーレ」をあと1時間考える事。

このあたり六日間30書をこした。

- ☆ 6月24日(土)夜12時《行進》90行書き終了。

今日は、なぜだか、■んでしまった。

明日、フィナーレを書きおえる事だ。あんまり凝らないほうがいい。 ラストだから、明日書きあげる事

- ☆ 6月25日(日)終曲『波の墓』45行  
午後1時 第一稿了。

## 【51頁】

合唱曲 《縄文》

再考および三考の準備

清書は7月11日(火)  
12日に発送

26日にする事。

1er 序曲《夕映え》約50行

再考 6月25日

三考 7月2日

再考  
一応スミ

2e ? デキズ ダメだな  
明るい白さに 約28行  
29日朝する事  
再考 6月26日  
場合によって《音楽》か 約38。  
三考 7月9日

3e 地球 《鏡の雪》 約140行

(合唱にすると 80行か) だめだ

完全にまる 再考 6月27日と29日  
二日間必要 三考 5日 6日、7日

- ⑧ どんな日も、30分だけは、このノートに向っていることにする。(5月4日)

【49頁】

- ☆ 5月5日(金)あさ7時—8時、考えた。もう序曲を(すでに書いた—中途まで—■■■)

のだが

書きすすめなければならぬ。  
1日、半ペラずつ。

- ☆ 5月6日(土)8時50分—9時20分考えた。午前
- ☆ 5月7日(日)午前午後0時5分—0時25分、考える。
- ☆ 5月11日(木)序曲第一稿了、1er 3時半■■だ。

- ☆ 5月12日(金)北海道へ飛ぶ日。午前11時40分—1時まで「鏡」——「縄文鏡」を考える。飛行機の事故などあるまいが(そう祈る)まさかの場合は、三善さん、今までのわたしの作品群から音楽《縄文》をつくって下さいと、ひそかに願っている。2e——2e「円い鏡の内と外」草稿50行一応できた。しかし、どこか浅い気がするなあ

(5月12日、1時記す)

○ルフランが多すぎるだろうか

- ☆ 5月18日(水)上記、草稿を改訂、(題未定) 2e

(波だたない にするか。

28行 第一稿。

小さいのでいい。しかし、あとでまた三考の要あり。

17日午前10時45分記。

- ☆ 5月19日(木)NHKテレビロータリ。■大沢宣彦、塚上勝也 両氏まつてカンパイ
- ☆ 5月20日(土)夕刻ほぼ50分、戦争の部を考える。  
ムヅカシネ。
- ☆ 5月21,22(月)、23(火)24日(水)25日(木)それぞれ20分宛は考えてきている。もう《戦争》の部を書き出していいのだが……。25日(木)あと20分考える。
- ☆ ただ今6月12日(月)。ほぼ17日 間休んだ。その間にバゼーヌのほんやく(およびあと書12枚)、心平論(35枚と30枚) 西欧美術家論—(ゴッホ)26枚などを書きはしたんだが……。
- ☆ 本日より27日(月)までの2週間で“縄文”に集中して最低4篇を書かなくてはならない。

【47頁】

77年6月18日あさ。

- a 縄文 19篇ぐらい、できてる。 } 21篇 60頁
  - b 水の詩から 2篇ぐらい、いれる } 30頁
  - c 三善さんのためのもの 6篇 30頁
- 以上■計 27篇 ぐらいか。 63頁 計90頁
- こんなところだ

☆ ひどく短いものを書くのだ  
あと3篇くらい(10行ほどのものを！)  
78'、6月17日記

詩集《縄文》 7月16日に清書をすますこと  
7月17日(月)に思潮社に托すこと。

〔A〕はじめのないはじめ  
(「水の話」から) ほぼ100頁～110頁だ。  
「釣り談義」

①の全体を！

- 〔B〕序曲 A 初一覧、覽書 計 3頁
- B 目次二頁 (ラストに) } ほぼ
- C-人名の 白紙の捨てページ 10頁 } 16頁
- でる作 タイトルその他で 4頁
- 品まで。

〔C〕本体 (折れている天)  
火口湖まで { ほぼ20篇  
ここに「釣り談義」 (a)物語 (夕映え)  
2eの「新年」を (b)火口湖  
入れる。 (朝焼け)

- 〔D〕おわりのないおわり 3篇か
- 1°踊り
- 2°行進
- 3°波に風を  
風に波を

「鎮魂」のよすがを  
■きびしく教えてく  
ださったのは三善晃  
さんである。この作品  
集《縄文》を三善さん  
に捧げたい。

【48頁】

三善晃さんに捧げる《縄文》 6篇  
～7篇

☆これは日々のノルマにしなければ  
いつまでも形とならない。  
やむをえず、そして喜んで、  
日課とする。

- ① 4月24日(月)午後0時～午後4時半  
この間 正味 1時間 とりくんだ。  
全篇の手がかりの、そのまた手がかりだ。
- ② 毎日少し宛書かねば不可能だ。4月25日(火)  
ストライキの日。正午すぎまで30分考える。  
すすまない。 9
- ③ 4月26日(水)30分、書いた。
- ④ 4月27日(木)午前10時半—10時  
20分まで考える。  
すすまぬ。
- ⑤ 4月28日(金)午前9時—10 11時  
まで、食事をはさんでほぼ1時間  
考える。すすまぬよ。
- ⑥ 4月 29日 これ、すんだが、ほとんどす  
すまぬ。
- ⑥' 4月29日(土)午前1時から1時間、  
やるぞ。  
できぬ
- ⑥" 4月29日、朝のチャンス逃してし  
まい、できない。
- ⑥ 4月30日 早おきして30分書く  
ことだ！

実行した。—しかし、やはり日に1時間半とれないと  
ダメだな。

- ⑦ 5月1日(誕生日)だめ。  
5月2日(現代書作家協会審査の日)午後  
6時半～7時半、考えた。そして書き始め  
た。だが、まだ、うまくいかないね。

【43頁】

王たちを書き加えて30篇にする事。

- 10 いけにえ(散文詩)24行、  
77年11月「相馬」90号
- 11 「新年」人形 「時間」 23行  
78年3月「相馬」92号
- 11 「新年」 「水」と改題して■
- ⑩ 11篇 はじめのあるおわり
  - √1 焼きもの 清書 スミ  
7月6日 26行  
76'7月刊「相馬」82号  
76年7月「相馬」
  - 2 一日時計環状列柱
  - √■ 2 遮光器土偶  
76'9月刊「相馬」83号  
清書スミ 7月6日 17行
  - 3 丹塗の壺 84号「相馬」  
76'12月刊 16行
  - √5 4 飢渴 (散文詩)24行  
77'5月「相馬」87号
  - 6 大形
  - √7 6 刑場 33行(34行)  
77年8月刊「無限  
ポエトリー2号」
  - 9 √7 冬 スミ 19行  
77年1月「別冊小説新潮冬季号」
  - √10 8 「苦悶」 スミ 13行  
(要再考) 6月26日夜  
水のなかの瞳  
未発表 7月8日夜了
  - √8 8 貝塚 17行  
77,3「相馬」86号
  - 11 9 夕焼け
  - 12 10 火炎深鉢 「91号」
  - 13 11 火口湖

【44頁】

空白

【45頁】

〔D〕 おわりのないおわり

考 1 舞■踏

音 2 行進

考

1er. 7月6日  
(再考のみ。まあ止む  
をえない。)  
ほぼ88行  
2e. 7月7日?

音 3 波の墓

考

1er 7月7日  
(再考のみ。止むを  
えぬ)44行

【46頁】

詩集 縄文 紺に

装幀 箱 黒地に《縄文》白ぬき

本 黒地に《縄文》赤ぬき

《縄文》の書 だれにたのむか

小野さんか

☆ 死にながら 生きていなければ  
ならない。

みんなが死にながら生きている  
のを 苦しめないですむように。

☆ 火に焼かれなければならない

みんなが 火に焼かれるのを  
やがて こわがらなくても

すむように。

☆ 『続縄文』とあわせて(これに■は二年かける)

《須恵》+ou《渡来人》を書くこと

(これは未発表だな。三年かける。)



☆ 7月18日(火)午後2時半立川八中  
(校歌の件)

桐谷校長におくられて立川発、4  
時に思潮社に小田次郎を訪ねて、  
『縄文』(決定稿)手交した。11月  
初頭に出ることをねがう。初版  
500部。印税として50冊、買上げ  
200部。あと250部を思潮社が売  
るわけだ。感慨があるのだ。

献辞

峰岸啓三、上参郷匡、高橋哲男、  
水谷ゆり子、長谷川章二  
生き続けているわたしの死者に。

これ、つけないことにした。

【40頁】

覚え書 ■400字

- a 鎮魂ということ
- b 錯乱が(おれの作品のなかに  
あらわれ。  
鎮魂では?  
||  
死者の魂をもとうとする  
肉体■へのあがきのあかし?  
ou ■ 魂ををうけとめた  
肉体のあがきのあかし?
- c このドラマ■■■■に身をお  
いているのが三善さんだ。

此此

【41頁】

空白

【42頁】

1頁 16行どり

詩集《縄文》構成プラン

本と活字の大きさは中村稔「羽虫  
のいる風景」に準■じよう

[A] はじめのないはじめ  
《天体》(《釣り談義》第一集 } 4頁分  
1977年12月 本文26行 }

[B] はじめのあるはじめ  
―――序曲―――▶タイトル [1頁]

序曲 (A) 夕映え 48行 ほぼなし (6月26日)  
スミ 第2稿 7月7日、53行  
第3稿? 7月10日 スミ 55行

[ダメ] B 鏡 第2稿 7月7日?  
ダメだ。徹底改作のこと

[考] C 雲 第二稿 7月7日?

[C] おわりのないはじめ I と II

I [10篇] →釣り談義(II)の「新年」は(I)のラストに  
スミ √ 童話 はじめのない [おわりのはじめ]  
スミ 26行

スミ ② 「水」(「新年改版」(流れる)時空間  
「それでも」 30行

スミ

[考] 4 闇 29行

[考] ⑤ 曙

③ 5 4 → ⑥⑦ 日時計環状列柱

スミ √ 相間

スミ ⑧ 相姦 77年7月「相馬」89号 21行

スミ ⑨ 8 受胎 23行 77年7月「相馬」88号

⑥ 花葬  
トル

【34頁】

《縄文》詩集のはじめに

■逸見猶吉の“報告”にあたるものを  
ぜひ 書かなくてはならないのだ

7月5日午前11時半 記す。

① 期間 { 7月5日～7月10日  
予定 { 第一稿  
7月10日～7月13日 完結

② パートを A、B、C にわけて、詩集の  
各部においてもいい のだが……。  
いずれにしる 《報告》なのだ、  
縄文という地獄でない  
地獄の。

いきなり ということがあろうか  
白■い石を■だければ ■赤いミミズが  
■■数十匹もくねりあっている

これがどうして いきなりなのか。

おれは 歩いて い■く(片足なくした  
ままで)掘りかえしたりするものか。

木につるされてさかさの カラスたち

おれは死につつある生きものなのか

(そんなことがあろうか、死んでしまった

死にもと、生きることをゆるされて  
いない未生のものが、いるだけだ)

【35頁】

☆ 生れないもの→それが縄文では  
なぜないのか。

☆ 見えているからには、これは義眼  
ではない、ただ誰かの目で

↓  
だれかの目がおれの目の穴に  
はまっている。

【36-37頁】

空白

【38頁】

三善晃さんに捧げようとして(その依頼の  
ために)新しく書いたもの■。 約400行

(A) 夕映え 53行

要4考 7月11日に。

10日と

(B) 舞踏 83行

再4考 7月11日に。

10日と

(C) 行進 7月12日に 81行

鏡の 清書のこと

(d) 雲 7月10日と11日 123行

要4考 と12日に 138行

(e) 波の墓

要4考 7月10日と11日と 49行

12日に

【39頁】

詩集全体の 27篇中の20篇だ。

清書は 10時間かかるよ。

(A) 7月13日午後6時からのこと ↑

(B) 7月14日(金)午後2時までに清

書すましてcopierする事。

(C) 7月15日(土)あさ三善さんに

発送のこと。

詩集《縄文》全部で96頁くらいか

16行×37字■詰

【12頁】

主人公たち(テロリスト、いやいやながらの)

(A)わたし

23才。

戦中の犬死をどうすれば犬死でなく  
ならしめることができるのか。

【13-15頁】

空白

【16頁】

(B) { 伯父さん(当年55才)  
      その奥さん(当年62才。始終アンチ  
      テロリスト)

【17頁】

空白

【18頁】

〔C〕主将格 P君 プロΛ

21才。 野球の二軍のエース。

甘いフェース。

☆ これがサイゴに裏切る。

☆ 「わたし」は許す。許すという  
ことは、「殺す」ことなんだな。

—「わたし」が殺す寸前に

P君の情婦が 処置する。

耳か、ペニスか、鼻か。

【19頁】

空白

【20頁】

〔D〕薬局の若主人(26才)

その奥さん (30才)

【21頁】

空白

【22頁】

〔E〕女子高校短大一年女子学生

(魚屋の娘。■水泳選手)

【23頁】

空白

【24頁】

〔F〕電気器具工具崩れ、目下、電気屋の

おとくいさん廻り

32才。

【25-27頁】

空白

【28頁】

☆ どこをどう襲撃するのか、  
それを考えるところから、  
この物語ははじまる。

【29-33頁】

空白

【表紙】

詩集  
《戦争》



《若年》  
長篇小説

三善晃氏に捧げる  
《縄文》

戦いのドラマからしか  
未来への時間は  
流れ出さないのだから。

宗 左近

【表紙肩】

縄文  
三善晃さんへ

【表紙裏】、【インデックス】、【インデックス裏】  
空白

【1-3頁】

空白

【4頁】

《戦争》(仮題) (1975年  
7月29日午前0時)

- ☆ もっとも生き生きとした時間を  
噴出させるための 装置。
- ☆ もっとも 男性的な詩集を。

【5頁】

空白

【6頁】

- ☆ 一聯 三行宛でやってみる。
- ☆ 一行は ひどく みじかい  
(20字以内で)
- ☆ おれと、おれを見ることのない  
お前よ

【7-9頁】

空白

【10頁】

- ☆ 長篇小説《若年》(仮題)  
のためのnotes
- ☆ これが後世への遺言だ。
- ☆ 1976年5月1日(57才)から書き  
はじめる。  
→ 1日20枚  
速いSpeedでたぶん3か月ぐらいで  
書き上げること (清書は、あとだ)
- ☆ はっきり ドストエーフスキー  
の《未成年》にまなぶ事。
- ☆ 完成は1976年12月30日だ。  
枚数は1200枚ぐらい。
- ☆ 主人公は 断じて“ぼく”だ。  
■ 当年22才  
無党派テロリスト (五六人)  
主人公のおれは副将格だ

【11頁】

空白

北九州市立文学館紀要 第7号

2025年3月31日 発行

編集・発行 北九州市立文学館  
北九州市小倉北区城内4番1号  
電話 093-571-1505

製 作 株式会社ゼンリンプリントテックス

※凡例については、各論考に記しました。

※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。

※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。

